

不調和から調和へ : Wuthering Heights におけるブロンテの理想と第二世代の位置付けをめぐって

山口, 雅史
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程

<https://doi.org/10.15017/6789538>

出版情報 : 九大英文学. 46, pp.47-86, 2003-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



不調和から調和へ
—— *Wuthering Heights* における
ブロンテの理想と第二世代の位置付けをめぐる

山口 雅史

序

Emily Brontë の唯一の小説 *Wuthering Heights* (1847) には、肉体と魂、文化（文明）と自然、嵐が丘（以下 WH と表記）と Thrushcross Grange（以下 TG と表記）といったような、いくつもの二項対立が見られる。第一世代の Catherine（以下第一世代のキャサリンをキャシー、第二世代のキャサリンをキャサリンと表記）は肉体と魂に引き裂かれるようにして死を迎え、キリスト教や礼儀・道徳などは人間の動物的部分と反発しあい、それらも含めたいくつもの二項対立が、『嵐が丘』という小宇宙の中で、WH と TG に集約されている。しかし物語の最後では、これらの激しい対立が収まることを思わせるような落ち着きを感じられる。つまり、物語は不調和な対立状態から、調和した融和状態へ展開していると言えるのである。

ブロンテが物語の後半、つまり第二世代を書いたことに対する是非については、批評家の意見が分かれるところであるが、概して第二世代は軽視される傾向が強い。¹ それは Heathcliff とキャシーの愛と憎しみが、読者に圧倒的な印象を与えるからであろう。このように見てみると、第二世代は不要なもの、第一世代を引き立てるための道具に過ぎないといった印象を受けるのも無理はない。しかし、作品の構成の上では、第一世代と第二世代には同等の比重がかけられていることから、² ブロンテが第二世代を書くにあたり、何かはっきりとした意図を持っていたことは疑いようがない。

そこで本論では、物語の最後に訪れる調和（の兆し）を描くことこそが、ブロンテが第二世代、ひいては『嵐が丘』自体を書いた意図であるという仮定のもとに、不調和から調和への流れを考察していきたい。論の前半では、第一世代で描かれている WH と TG との二項対立に焦点を当て、後半では、物語の流れに沿って、第一世代の不調和が調和へと向かって行く様子に焦点を当てていく。そして、この調和こそがブロンテが『嵐が丘』の中で理想としていることであり、これによって従来から軽視されがちな第二世代が、『嵐が丘』において必要不可欠な要素であることを指摘したい。

I

まずは、両家の住人の対比の中でも、もっともわかりやすい外見上（目、髪、肌）の対比から見てみよう。対象はそれぞれの家の軸になっている Earnshaw と Linton を名乗る人物たちを中心とする。ヒースクリフは正確にはアンショ一家の人間ではないが、“the name of a son who died in childhood”(30)を付けられたことから、アンショ一家の仮の一員になったと解釈できるので、Hindley やキャシーと同じように対象に含むことにする。

・WH

ヒースクリフ：黒目(3,45,159,245,251)、黒髪(29,73,159,248,256)、黒肌(5,29,73,88,137)。

キャシー：娘のキャサリンが“the Earnshaws’ handsome dark eyes”(146)を持っており、“their [Catherine and Hareton’s] eyes are precisely similar”(246)との記述があることから、おそらく黒目であると思われる。³ 髪と肌については特に記述はないが、キャシーの、“I’m not envious: I never feel hurt at the brightness of Isabella’s yellow hair, and the whiteness of her skin”(77)との台詞から、少なくともリントン家の人々とは異なった容姿であることがわかる。

ヒンドリ：目はキャシー似とあるのでおそらく黒(108,141)、黒い頭(85)、

肌については特に記述なし。

(黒は **dark**、**black** 両方の表現を含む。また、三人の外見上の記述のすべてを取り上げているわけではない。)

・ TG

エドガー：青目(40,45)、明るい髪(45,52)、白肌(45)。キャサリンは、“the Lintons’ fair skin, and small features, and yellow curling hair” (146)を持っているとの記述がある。また、“blue eyes of the Lintons” (40)とあることから、青目はリントン家の特徴であると言える。

イザベラ：青目(40,84)、黄色の髪(77)、白肌(77,84)。

(髪の色表現は **light**、**yellow** などがあり、肌の色表現は **white[ness]**、**fair** などがある。また、二人の外見上のすべての記述を取り上げているわけではない。)

上記の内容から、両家の人々はそれぞれの家系で同じ外見上の特徴をもっていることがわかる。中でもヒースクリフの黒さが何度も描写され、強調されている点は注目に値する。WH の庭には“**black currant trees**” (242)が生えており、それが WH が建っている領域を意味するであろうことが、後ほどそれが TG の花と植え替えられようとする事との関係でわかってくる。＜黒＞は人でも物でも WH を表す色であり、⁴ それをもっとも体現しているのがヒースクリフなのである。

次に、気質や体質などの内面の対比を見てみよう。

・ WH

ヒースクリフ：激しい、獰猛な(46,81)、丈夫(126,143,248)。

キャシー：精気に満ちている、短気、激しい(33,70,79,92,102)、丈夫(101)。“the Earnshaws’ violent dispositions” (102)との記述から、気質の激しさはアンショ一家の特徴であると言える。

ヒンドリ：激しい(51,102)、丈夫(59)。

(気質の表現は *fierce, violent dispositions, fiery temper* などがある。体質の表現は *strong, stout, tough* などがある。また、三人の内面に関するすべての記述を取り上げているわけではない。)

・TG

エドガー：精気に欠ける、性質の穏やかさ(52,142)、虚弱(147)。

イザベラ：鋭い感情と気質(79)、虚弱(147)。“Her [Isabella’s] family were of a delicate constitution: she and Edgar both lacked the ruddy health” (147)との記述から、虚弱体質はリントン家の特徴であると言える。

(気質の表現は *mildness of his nature, a keen temper* などがある。体質の表現は *a delicate constitution* などがある。また、二人の内面に関するすべての記述を取り上げているわけではない。)

外見上は両家が異なった特徴を持っているだけだったが、両家の内面に関する特徴はほぼ正反対であると言える。それは、妻に死なれた後のヒンドリとエドガーの様子を比べて、“why their conduct was so opposite in similar circumstances” (143)と語る Ellen Dean (Nelly)の台詞などからも窺える。

上記の内容から、WHの住人とTGの住人はそれぞれの家で独自のグループを作っており、それらがほぼ正反対であることがわかる。しかし、それが単純に血統上の違いであるとは言い難い。なぜなら、登場人物の中には、場所を移動することによって様子が変わってしまう人物も見られるからだ。場所は、そこに住む人々に何らかの影響を与えているのではないだろうか。次章では、不調和の考察の続きとしてこの問題について考えてみたい。

II

ここでは、それぞれの家（土地）がどのようなところなのか、またそれらの家（土地）が住人にどのような影響を与えているのかについて見ていくことにする。

・WH

Lockwood は、初めて嵐が丘に来たときの印象を次のように述べている。

“Wuthering” being a significant provincial adjective, descriptive of the atmospheric tumult to which its station is exposed in stormy weather. Pure, bracing ventilation they must have up there, at all times, indeed: one may guess the power of the north wind, blowing over the edge, by the excessive slant of a few, stunted firs at the end of the house; and by a range of gaunt thorns all stretching their limbs one way, as if craving alms of the sun. Happily, the architect had foresight to build it strong: the narrow windows are deeply set in the wall, and the corners defended with large jutting stones. ⁵

The apartment and furniture would have been nothing extraordinary as belonging to a homely, northern farmer,

(4)

WH は<丘>の上に立っているので、常に強い「北風」にさらされている。

「壁に深く埋まった狭い窓と、大きな張り出した石によって守られている家の四つ角」という作りは、WH が「北風」からそこに住む人々を守っているような印象を与える。このような家の作りから、WH がこの「北風」の影響を受けて存在していることは明らかであるが、建物だけでなくそこに住む人々もまた、この風の影響を受けていると思われる。エミリは作品中でよく

人間と木や花などの植物を重ね合わせるようにして描いているのだが、⁶ 引用文中では「もみの木」と「ハシバミ」がそれにあたるだろう。実際に作品中でキャシーはネリーによって“thorn” (72)と比喻されており、ヒースクリフはヘアトンに “we’ll see if one tree won’t grow as crooked as another, with the same wind to twist it!” (145)と言っていることから、引用文中の「北風」によって一方向に傾いている「もみの木」と「ハシバミ」は、単に庭に生えている植物を指すだけでなく、「北風」によって同じように影響を受けている WH の人々をも表していることがわかる。そして、「縮んだ」や「やつれた」、「極度に傾いた」などの形容詞から、この「北風」の影響は WH の住人たちにも好ましくないものであるようだ。これらのことから、「北風」が吹いてくる方向にある Penistone Craggs (以後は PC と表記) は、WH とそこに住む人々に密接な関係があり、両者を見る際に非常に重要な場所になってくると思われる。

ここからは、WH の北に存在し、影響を与える PC について見ていくことにする。PC については、人が住んでいない分 WH や TG と比べて作品中の記述がかなり少ないが、神聖なところとして描かれているようだ。では、実際にネリーとキャサリンの会話を通してその描写を見てみよう。

“And what are those golden rocks like, when you stand under them?” she once asked.

The abrupt descent of Penistone Craggs particularly attracted her notice, especially when the setting sun shone on it and the topmost heights, and the whole extent of landscape besides lay in shadow.

I explained that they were bare masses of stone, with hardly enough earth in their clefts to nourish a stunted tree.

“And why are they bright so long after it is evening here?” she pursued.

“Because they are a great deal higher up than we are,” replied I; “you could not climb them, they are too high and

steep. In winter the frost is always there before it comes to us; and, deep into summer, I have found snow under that black hollow on the north-east side!”

“Oh, you have been on them!” she cried, gleefully. “Then I can go, too, when I am a woman. Has papa been, Ellen?”
(emphasis added, 147)

PC と「丘」の一番高いところだけに日があたり、その他のところはすべて影に覆われるとき、キャサリンは PC を「金色に輝く岩山」と呼び、非常に強い興味を示している。ネリーの説明によれば、まず PC は TG よりも「ずっと高いところにある」。そして、「縮んだ木を養うほどの土さえほとんどなく」、真夏でも「雪」が残っているようなところである。ここでも、「木」は単に植物を表すだけではなく、WH の描写のときのように、人間も含めた生き物全般を指していると思われる。そこは TG はもちろんのこと、WH よりもはるかに生き物にとっては苛酷な環境であるようだ。“flesh and blood” (221,255) の気配を感じさせない PC は、非常に靈気に満ちているような印象を受ける場所である。

「血と肉のあるもの」という台詞は、ヒースクリフが一回目にキャシーの墓を掘り返したとき、そして彼の死期が近づいてキャシーの霊を感じたときに、肉体のある自分と肉体のないキャシーとの違いを意識して言う台詞である。キャシーは死んで霊体となったのだが、彼女が TG で死ぬすぐ前に次のような台詞を口にしている。“I shall be incomparably beyond and above you all” (125) つまり、死んで血と肉のない霊体となったキャシーが向かったと思われる（正確には向かおうとしたが、ヒースクリフがいなかったために荒野で迷ってしまった）ところが、PC なのである。

以上のことから、PC がどのようなところかが見えてくる。“the Fairy cave” (147) があると言われていることから、PC は肉体的なものが存在できない代わりに精神的なものが存在するところであり、魂が肉体から解放された後に向かうべき神聖な場所であると考えられる。

PC から吹いてくる「北風」も、当然このような精神的な性質を持ってい

と思われる。先程、WHの住人が「北風」によって同じように影響を受けている（ねじ曲げられている）ことについて触れたが、それは、建物の周りの植物の様子からもわかるように、自然な状態が歪められることを意味する。つまり、「北風」には内面（特に魂）を抑えているものを弱めるような働きがあり、それによって肉体の活動は低下し、様々な教化も解けてくる。そしてその結果内面の活動がより活発になり、本能的、感情的な面が強く表れてくるのだと思われる。「北風」は＜解放＞を意味するものではないだろうか。ここからは、キャシーが精神錯乱に陥ったときの場面を通して「北風」の働きを見てみることにする。

キャシーは、エドガーとのいさかいがきっかけとなって精神錯乱に陥ったとき、自分が変わってしまった、今の自分は本当の自分ではないということ強く感じている。そしてそのような状態のときに、ネリーに窓を開けて北東からの風⁷に触れさせてくれるようにと頼むのである。

I wish I were out of doors — I wish I were a girl again, half savage, and hardy, and free; and laughing at injuries, not maddening under them! Why am I so changed? why dose my blood rush into a hell of tumult at a few words? I'm sure I should be myself were I once among the heather on those hills. Open the window again wide, fasten it open! (98)

後ほど詳しく見ていくが、TGは表面的なものを重視し、内面を抑制しなければならないところである。彼女の表面的な部分を支えていたエドガーと離れてしまったことで、その部分はもはや自分が変わってしまったことを見せ付けるだけ、魂の自由を制限するだけのものになってしまった。キャシーがTGから、そして本当の自分を縛り付けている表面的なものからの解放を望んでいるときに求めるものが、「北風」なのである。しかし、究極的には解放とは死を意味する。だからこそ、WHは＜丘＞に住む人々を「北風」から守っているのだ。

WHが「北風」に対する防御壁としての役割を果たしていることはわかっ

だが、アンショ一家の気質や彼らの行いから、「北風」の影響を完全に防いでいるとは言えない。また、彼らの気質や行いが単に血統上のものだけではないことを示すためにも、TG から WH に移ってきた後、「北風」の影響を受けて様子が変わったイザベラを例に挙げておく必要があるだろう。

イザベラは生まれも育ちも TG で、「紳士階級」(75)の人間であった。しかし、彼女が WH に住み始めて間もないころ、彼女を訪問したネリーは、“she [Isabella] already partook of the pervading spirit of neglect which encompassed her” (115)、と言っている。彼女はネリーに宛てた手紙の中で、“How did you contrive to preserve the common sympathies of human nature when you resided here?” (106)と書いているが、これは TG では保てるものが WH では保てないということを表している。この「人間性に共通の思いやり」とは、WH に住んでいるヒースクリフが見下している “*duty and humanity*” (120)、“*pity and charity*” (120)であろう。彼はそれらを“*shallow cares*” (120)、つまり表面的なものと呼んでいる。イザベラが初めて WH に来たとき、彼女は当然のこととしてその住人にこれらの感情を示し、相手から示されることを期待していた。具体的に言うと、ヘアトンは挨拶のキスをしなければいけないという義務感や、ヒンドリや召使いの Joseph からは当然示されるであろう親切心などである。

WH で暮らすうちに、キリスト教の影響の強い TG で育ったイザベラは、ネリーから“*One might suppose you had never opened a Bible in your life*” (139)と言われるまでに変わってしまった。彼女は「北風」によって表面的なものから解放された結果、WH の「雰囲気」と同化したのだと思われる。正に、ヒースクリフが言ったように、「一本の木が同じ風に吹かれて、他の木と同じようにねじ曲げられ」たのだ。

WH は、「北風」を媒体として PC から影響を受けるため、その住人は表面的なものには捕われない。そして、抑制がかからずに内面の活動が活発になる分、良くも悪くも内面に素直な激しい生き方をするようになるのである。

・ TG

キャシーと一緒に TG を覗きに行ったヒースクリフは、客間の窓から中の

様子を覗き、次のように感じている。

[It] was beautiful — a splendid place carpeted with crimson, and crimson-covered chairs and tables, and a pure white ceiling bordered by gold, a shower of glass-drops hanging in silver chains from centre, and shimmering with little soft tapers. (38)

外側の様子については特に記述がないのでよくわからないが、客間から推測すれば、TG は上流階級の邸宅と呼べるだろう。次に、それを裏付けるようなキーワードをいくつか挙げてみたい。

drawing-room (38)、decent house (40)、sweet, low manner of speaking (55)、parlour (75)、gentry (75)、due measure of politeness (76)、dainty elegance (77)、propriety (89)、moral, virtuous (90)、library (93)

TG は、ロックウッドやキャサリンが“farm-house” (165)と呼ぶような WH とは正反対の、文化的で洗練されたところであることがわかる。また、TG の窓から WH の方を眺めながら言うネリーの“Wuthering Heights rose above this silvery vapour; but our old house was invisible — it rather dips down on the other side” (74)という言葉から、WH は<丘>の上にあるのに対して TG は「低地 (the valley, 159)」にあることになるので、PC からの「北風」の影響をあまり受けない。その結果 TG の住人は、ヒースクリフが「薄っぺらな心遣い」と言うような、表面的なものを身に付けることができる。代わりに TG と強く結びついていると思われる場所は、Gimmerton Kirk (以下 GK と表記) である。ここからは、TG と GK がどのような関係にあるのか、また GK がどのようなところで、その影響が TG にどのように表れているのかについて見ていきたい。

教会は主に礼拝や結婚式、遺体を埋葬するための場所などとして、キリス

ト教を信仰する人々の一生と深く関わっている。この作品の中でも GK はこれらの役割を持っているが、ここではキャシーの埋葬を通して考察を進めていく。

The place of Catherine's interment, to the surprise of the villagers, was neither in the chapel, under the carved monument of the Lintons, nor yet by the tombs of her own relations, outside. It was dug on a green slope, in a corner of the kirkyard, where the wall is so low that heath and bilberry plants have climbed over it from the moor; and peat mould almost buries it. (131)

GK には礼拝堂内にリントン家の墓、戸外にアンショ一家の墓があり、敷地の外は荒野となっている。これはキリスト教の影響力の度合いを表しており、礼拝堂から離れるほどキリスト教の影響力が弱くなることを示していると言えるだろう。アンショ一家は、ヒンドリを見ればわかるように、Frances の死後は教会には足を運ばなくなったと思われる。そして“The curate dropped calling” (52)。またキャシーにいたっては、子供のころからヒースクリフと一緒にあって、“absolute heathenism” (40)に育っていた。一方リントン一家は、TG の主のエドガーがキャシーの死後“ceased even to attend church” (142)が、娘のキャサリンは“the chapel, the only building she had approached or entered, except her own home” (147)との記述から、弱まったとはいえ、TG はまだキリスト教の影響を受けていると思われる。

キャシーの遺体が埋葬されたのはリントン家の墓でも、アンショ一家の墓でもなく、敷地の片隅であった。しかし、教会の敷地と荒野を区切る塀はほとんど土に埋もれてしまい、キャシーの墓は事実上荒野にあることになる。ヒースクリフは、キャシーが埋葬された日の夜、彼女の棺を開けようとする。棺の蓋が開き始め、釘がはずれようとしたそのとき、ヒースクリフは突然墓穴の上にキャシーの存在を感じる。これはわずかに空いた棺の隙間からキャシーの魂が外へ出たからであり、このことから、棺が死者の魂を閉じこめる

役割を果たしていたのだと思われる。ヒースクリフは、その後“it ... let me home” (221)と言っている。しかし、他の霊はどうであろうか。

キャシーはヒースクリフとよく墓地に肝試しに行ったと言っているが、それはそこに集中して霊が出るのが前提となっている。これは、死者の魂が教会の敷地から外に出られないことの結果である。ヒースクリフは、棺が腐った後自分の体とキャシーの体が混ざり合うことを望んでいるが、このことは時間の経過と共に棺が腐ること、その結果中に閉じこめられていた霊は外に出られるであろうことを示している。しかし、棺から出られても教会の敷地から出られないのは、教会が、キリスト教そのものが人々の魂を縛り付け、教会の外の世界から隔離しているからであると思われる。その結果、人間は自然を構成する一部としての人間から、自然から切り離されて孤立した人間へと変わってしまったのではないだろうか。それは、TG が広い範囲にわたって、鍵のかかった門や生垣によって外からの影響を排除していることから推測される。対照的に、キャシーの魂が教会に縛り付けられなかったのは、彼女がキリスト教を信奉しておらず、⁸ 彼女の墓も事実上荒野にあったからであろう。

これらのことから、教会（キリスト教）は自然からの隔離によって魂の自由を制限しており、教会と結びつきの強い TG に特にその傾向が表れてくると思われる。そしてその結果、TG では「薄っぺらな心遣い」とキリスト教という二つの要因によって、内面（魂）が抑圧されることになる。

では実際に、三年ぶりに姿を現したヒースクリフが TG を訪問する場面を通して、TG に表れているそれらの影響を見てみよう。

“Catherine, unless we are to have cold tea, please to come to the table,” interrupted Linton, striving to preserve his ordinary tone, and a due measure of politeness. “Mr. Heathcliff will have a long walk, wherever he may lodge to-night; and I’m thirsty.” [emphasis added, 76]

三年ぶりにヒースクリフにあったキャシーは、喜びの色を隠せない。妻の様

子を見たエドガーは当然不快に感じるのだが、それをあからさまに表に出すのは「礼儀」に反してしまう。そのため、キャシーとヒースクリフを引き離したいという本心を「礼儀」で抑えつつ、最後まで紳士的な態度は崩さないように努める。

また、自然からの人間の隔離は、ヒースクリフを締め出すことに表れているようだ。

“I have been so far forbearing with you, sir,” he said, quietly; “not that I was ignorant of your miserable, degraded character, but I felt you were only partly responsible for that; Your presence is a moral poison that would contaminate the most virtuous; for that cause, and to prevent worse consequence, I shall deny you, hereafter, admission into this house, (90)

失踪前のヒースクリフは、低いところで押さえつけられ、虐待されていたためにいじけた子供といった感じであった。しかし、帰ってきたあとの彼は、大人っぽさや表向きの洗練された雰囲気以上に悪徳が前面に押し出されており、キャシーやネリーまでもが、急にそれを強調するような言い方をするようになる。つまり、彼はエドガーが言うように「道德上の毒」、悪い面の塊といった描き方をされているのである。そして、TG はこれを排除しようとする、つまり人間が持つべき要素の一部を切り離そうとするのだ。ここで、エミリが *Brussels* 留学中に書いたエッセイ『蝶』を思い出していただきたい。

自然は説明不可能な謎だ。それは破壊の原理に基づいて存在している。あらゆる生き物は他の生き物に対する容赦のない死の道具とならなければならない。さもなくば自ら生きるのをとめることになる。(中略) どうして人間は創造されたのか。彼は苦しめ、彼は殺し、彼は貪り食う。彼は苦しみ、死に、貪り食われる—それが彼のすべての生涯だ。(中略) この地球は、そのもっとも貧弱な美でさ

え人間の想像力を限りなく凌駕する新しい天の、そして新しい大地の、胚芽なのだ。(中略)そしてそのときこそ、罪がその毒を最後の一滴まで使い果たし、死がその投げ矢を最後の一本まで投げ尽くしてしまい、罪と死がふたつながらに、燃えさかる宇宙の葬いの薪の上で息絶え、それまで生け贄とした者たちを幸福と栄光の永遠の領域に残していくだろう。⁹

ここでは、人間は破壊の原理に基づく自然の一部として、その中に組み込まれている。そして、人間の基準で言ういわゆる悪徳もまた必要悪として受け入れられ、自然を構成する一面として認識されている。人間は人間である前に生き物であり、自然の中では他の生き物と何ら変わりはない。それにもかかわらず、生き物として持つべき一要素（悪徳だけに限らず、TG の価値観と照らし合わせて好ましくない WH 的なもの）を排除してきたために、リントン家の人々は自らを自然から隔離してしまったのだと思われる。そしてその結果、内面の活動（魂の活動範囲）も制限されることになるのだ。こちら、このようなリントン家の特徴が単に血統上のものだけではないことを示すために、WH から TG に移った後、影響を受けて様子が変わったキャシーを例に挙げておく必要があるだろう。

キャシーが TG と接することになったきっかけは、TG に侵入して番犬に足をかまれ、そこに五週間滞在したことである。そして、この出来事をきっかけに、キャシーは TG から影響を受け TG の人へと変わっていく。ネリーは、ヒースクリフは三月も同じ服で、顔から手から泥と埃にまみれていたが、キャシーもそれと同じような“a rough-headed counterpart to himself” (42) みたいだったと言っているので、TG に滞在する前の彼女は外見に気を使わない人物だったと思われる。しかし、TG 滞在后、彼女は上品な令嬢となって帰ってくる。犬やネリー、ヒースクリフなどに対しても、彼女は汚れが自分のきれいな服に付くのを気にして、なかなか触れようとしない。表面的なものへのこだわりは、明らかに TG から影響を受けた結果である。

その後、キャシーとリントン家の人々との交流は続き、彼らがヒースクリフを悪く言えばそうしないように心がけつつも、家では笑われるだけなので

行儀よくすることも少なかった。そしてついに、彼女はエドガーからの求婚を受けるにいたったが、ネリーにその選択が正しかったのかどうか尋ねに行く。そして、彼女はエドガーからの求婚を受けた理由として、次のようなことを挙げている。エドガーが美男子で、若くて朗らかで、自分を愛してくれて、お金持ちで、エドガーと結婚すれば自分はこのあたりで一番の夫人になれるから。キャシーがこれほどエドガーとの結婚を肯定しておきながらネリーにこの選択の是非を尋ねたのは、彼女が自分が間違っていると確信していたからだ。心の底ではヒースクリフを愛していながらもエドガーからの求婚を受けたのは、何度も繰り返すように、彼女が TG から影響を受けた結果であり、それはネリーの世の中にはエドガーよりお金持ちでいい男は他にもいるという言葉に対する彼女の答えに集約されている。“If there be any, they are out of my way — I’ve seen none like Edgar” (62)。つまり、このときのキャシーは目に見えないものに意味を見出せずにいたのだ。対照的に、エドガーとヒースクリフに引き裂かれるようにして TG 化が緩んだキャシーの様子は、ネリーによって次のように述べられている。

[They] no longer gave the impression of looking at the objects around her; they appeared always to gaze beyond, and far beyond — you would have said out of this world. (122)

TG は、＜低地＞という立地条件によって「北風」からの影響をあまり受けず、その住人は表面的なものにこだわっている。そして、GK からの影響を強く受けることもあいて、そこに住む人々は自然から切り離され、内面の活動に制限のある生き方をするようになるのである。

以上のことから、WH と TG が正反対の性質を持っていることがわかったが、作品中で不調和が描かれていると言うにはまだ不十分であろう。次に、両家が不調和にあるということを、両家のもつ排他性を通して見てみたい。

III

物語の中では、程度の差こそあるが、何度も排他性が描かれているようである。WH と TG がお互いに排他性を持っているのなら、両家の間には不調和が存在すると言えるだろう。最初に排他性が描かれているのは、ロックウッドが初めて WH を訪問したときである。

The “walk in,” was uttered with close teeth and expressed the sentiment, “Go to the Deuce!”. Even the gate over which he leant manifested no sympathizing movement to the words, (3)

Half-a-dozen four-footed fiends, of various sizes and ages, issued from hidden dens to the common centre. I felt my heels and coat-laps peculiar subjects of assault;(6)

ここでは二つの場面を例に挙げたが、二回 WH を訪問する間に、彼は何度も WH（住人だけでなく動物や建物さえも含めて。つまり様々な要素が集約されているのである）の持つ排他性を身を以って経験する。それは、彼自身が “intrusion” (7) という言葉を使っているように、彼が WH から見れば異種だからに他ならない。彼は London の出身で正確には TG の人間ではないのだが、以下の記述から、リントン家の人々とかなり近い性質を持っていることがわかる。

He had a sweet, low manner of speaking, and pronounced his words as you do: that’s less gruff than we talk here, and softer. (55)

[She] and Edgar both lacked the ruddy health that you will generally meet in these parts. (147-148)

リントン家の人々はどちらかというロックウッドに近い都会人であるよう

だ。また、イザベラがヒースクリフと結婚後 WH に来たときの様子は、先程見たロックウッドが排他性を受ける様子と非常によく似ていることも補足として挙げておこう。彼は仮にはあるが TG の主人であるし、リントン家の人々との類似からも、彼の訪問は TG の人物の訪問であるにとらえることができる。

WH の人物が TG の排他性の影響を受ける例としては、ヒースクリフとキャシーの TG 侵入がわかりやすいだろう。彼らは夜中に「生垣の隙間から (TG の領域に) 入り込んだ (crept through a broken hedge, 38)」。これは TG から見れば当然非常識で、二人に悪意はなくても排除されることになる。二人の素性が知れなかったら、何を言っても牢屋か絞首台行きだっただろう。捨て子のヒースクリフにいたっては、TG との価値観から見れば異種もいいたるところであり、素性がわかっても追い出されてしまう。

ヒースクリフの世代が生きていた間はこの排他性は消えず、イザベラやキャシーなどは、場所に同化することでその影響を抑えていた。しかし、物語の最後では、最初の WH 訪問で排他性の影響を受けたロックウッドは、最後の訪問であっさりと受け入れられる。

I had neither to climb the gate, nor to knock – it yielded to my hand.

That is an improvement! I thought. And I noticed another, by the aid of my nostrils; a fragrance of stocks and wall flowers, wafted on the air, from amongst the homely fruit trees. (234)

TG に近い性格を持っているロックウッドの訪問に排他性が働かないのは、両家の関係に大きな変化があったことを示している。さらに、もう一つの進歩として花の香りが挙げられている。進歩というからには前回の訪問の際にはなかったものであり、ヘアトンとキャサリンが、ジョウゼフの苦情を受けて位置は変えたものの、TG から WH の庭に移した花の香りであろう。黒や緑の低木が香りのよい色鮮やかな花々に入れ替えられたは、今までの WH が

変化し、TG と融和し始めたことを意味しているのであろう。TG の人間だけでなく花までもすっかり WH に入っているのは、排他性がなくなった結果だと思われる。

以上のことから、様々な相反するものがそれぞれ WH と TG とに集約され、それらがお互いに排他性をもって反発しあい、大きな不調和を生み出していたことがわかった。しかし、先程見たように、物語の最後ではこれらの反発が収まることを思わせるような落ち着きを感じられる。『嵐が丘』は、やはりこの不調和から調和への流れを描いていると言えるのである。では、次章では物語に沿って実際にその流れを見てみることにする。

IV

不調和は、1500 年、ヘアトン・アンショーが＜丘＞の上に WH を建てたときから始まったと考えられる。そして、ヒースクリフの“*They [the Lintons] see us [the Earnshaws] at church, you know, though we seldom meet them elsewhere.*” (40)との台詞から、WH と TG はいわゆる近所付き合いなどはしておらず、これまで見てきたように、四マイルという距離以上に様々な面で離れていたのだと思われる。

このような関係は、WH にヒースクリフがやって来たことによって変わっていく。この作品の中では、彼がどの地域（地方や国）から来たのかといった実際的なことよりも、彼がどのような領域から来たのか、どのような性質を持っているのかといったことの方が重要ではないだろうか。この視点から彼が WH に来てからの様子を見ると、以下の点が重要になってくると思われる。

- ヒースクリフの黒さが強調されていること(29)
- 英語が話せるにもかかわらず、何度も誰にも理解できない言葉を話すこと(29)
- 幼くして死んだ WH の子供の名、＜ヒースクリフ＞が与えられ

ること(30)

- アンショー氏が「不思議にも(strangely, 30)」ヒースクリフをかわいがること(30)
- わずかの間にキャシーと非常に仲良くなっていること(30)

ヒースクリフは、幼くして死んだ WH の子ヒースクリフの再来だとは考えられないだろうか。彼が誰にも（人間には）理解できない言葉を話すのは、彼の感情が自然と強く共鳴していることから、彼が死んだことで一度人間の領域から自然に帰ったからではないだろうか。後で見るように、作品中で＜黒＞と＜死＞が強く結びついており、彼の黒さは一度死の領域を経験したことによると考えられるのではないだろうか。また、アンショー氏が彼をかわいがるのも、キャシーが彼と仲良くなるのも、彼が血はつながっていないくても魂がつながった家族の一員だからではないだろうか。¹⁰ アンショー氏が死んだときのヒースクリフとキャシーの様子は、二人の強い精神的なつながりを感じさせる。

The little souls were comforting each other with better thoughts than I could have hit on; no parson in the world ever pictured Heaven so beautifully as they did, in their innocent talk; and, while I sobbed and listened, I could not help wishing we were all there safe together. (emphasis added, 35)

この場面で彼らは“souls”と表現されている。ここでの“souls”は正確には「人」の意味だが、むしろこの場面での彼らは、文字通り人間の本質である魂を体現し、非常に深いレベルでの交流を行っていると考えられる。彼らが無垢な会話の中で描いていた「天国」は、死者の魂が向かう精神的な天国であると思われる。そして、アンショー氏がそこに行ったと考えることで、彼らはお互いに慰め合っているのだ。

また、この「天国」はネリーにとっても理想的なものであるようだ。この

場面ではこの「天国」の具体的な記述はないが、キャシーが死んだときにネリーが語る死者が入っていく理想の世界は、この「天国」のことを言っているのだと思われる。

I feel an assurance of the endless and shadowless hereafter
— the Eternity they have entered — where life is boundless
in its duration, and love in its sympathy, and joy in its
fulness. (128)

この話を聞いたロックウッドは、「異端的な (heterodox, 129)」ものを感じたと言っているが、事実そうであろう。だからこそ、どんな牧師でも描けない「天国」なのである。そして、後ほど見ていくように、この「天国」はキリスト教の天国とは性質を異にするものである。二人がいた“the children’s room” (35)は、この「天国」を描くことができる場所として非常に重要な意味を持つてくるのだ。

しかし、ヒンドリがフランシスを連れて帰ってきたことで、様子が変わってくる。彼女は“dying”(36)と「喪服 (black, 36)」を極度に恐れており、¹¹ その結果色黒のヒースクリフにも嫌悪感を示す。彼女の機嫌が悪くなるにつれてヒンドリも暴君になり、WHの二階にある「子供部屋」の「天国」は、一階の「うち (the house, 4)」にある“paradise on the hearth” (17)に脅かされる。

そしてその結果、二人が取った行動は、“[to] run away to the moors” (37)であった。彼らは、おそらく脅かすもののない「荒野」で、「子供部屋」の「天国」を再現しようとしていたのだと思われる。そして、彼らは「荒野」を下ったところにあるもう一つの天国、TGに入り込むことになるのだ。

Old Mr. and Mrs. Linton were not there. Edgar and his
sister had it entirely to themselves; shouldn’t they have been
happy? We should have thought ourselves in heaven! ...
The idiots! That was their pleasure! to quarrel who should

hold a heap of warm hair, and each begin to cry because both, after struggling to get it, refused to take it. ... I'd not exchange, for a thousand lives, my condition here, for Edgar Linton's at Thrushcross Grange (emphasis added, 38)

引用文の前には、2 章で引用した内装の美しさが描かれている。ヒースクリフは、そのような場所を二人だけで（脅かすもののない状態で）独占している状態を「天国」と呼んでいるようだが、それは精神的な「子供部屋」の「天国」とは正反対の物質的な「天国」である。¹² それ自体は必ずしも否定するものではないのだろうが、そこでエドガーとイザベラがばかばかしいくらいちっぽけなことで泣いたりわめいたりしているために、彼は自分達の「天国」と比較してこの「天国」を否定しているのである。

この TG 侵入がきっかけとなって、「子供部屋」の「天国」は崩壊する。キャシーは犬にかまれたことが原因で TG に五週間滞在することになるが、2 章で見たように彼女が TG 化して WH に戻ってきたとき、すでにヒースクリフとの間には距離ができています。そしてもっとも決定的だったのは、ヒンドリがキャシーとヒースクリフと一緒にさせなくなったことである。このときから、キャシーが後に“blank” (98) と呼ぶ七年間が始まることになる。「子供部屋」の「天国」は先程見たように精神的な天国だったが、それが崩壊してしまったのは、やはり彼らが肉体を持っていたからであろう。彼らは「天国」を形成していたのではなく、「描いていた (pictured, 35)」に過ぎなかったのだ。この「天国」もまた不完全な状態だったのである。

ヒースクリフとキャシーの TG 侵入がきっかけとなって、今までなかったと思われる WH と TG との交流が始まる。これまで見てきたように WH と TG は正反対であり、ここではリントン夫人からの要望で、もっとも WH 的な性質を持っているヒースクリフを屋根裏部屋に閉じ込め、WH が TG に合わせる形で、「炉辺の楽園」での上品で文化的な交流が行われる。しかし、それも長くは続かなかった。フランシス¹³ がヘアトンを産んですぐに死ぬと、ヒンドリはすっかり自暴自棄になり、もはや TG との交流はなくなる。「子供部屋」の「天国」、「炉辺の楽園」が相次いで崩壊した WH は、“an infernal

house” (52)になってしまう。

その後もキャシー個人は TG との交流を続けていたが、彼女がその影響を受けて教化されていくに連れて、ヒースクリフはますます墮落していくようになる。彼らの「うち」での会話を見てみよう。

He struggled long to keep up an equality with Catherine in her studies ... he yielded completely; and there was no prevailing on him to take a step in the way of moving upward, when he found he must, necessarily, sink beneath his former level. (emphasis added, 53)

“You never told me before that I talked too little, or that you disliked my company, Cathy!” exclaimed Heathcliff in much agitation.

“It is no company at all, when people know nothing and say nothing,” she muttered. (54-55)

一方が上がって一方が下がることで、勉強だけに限らず以前の「同一性」はなくなってしまい、知識や言葉に重きを置くようになったキャシーは、ヒースクリフを否定するような発言までするようになる。これは、結果的に過去の自分や「子供部屋」の「天国」さえも否定することになるのである。

ヒースクリフと決裂したすぐ後に、彼と入れ違いでエドガーが「うち」に入ってくる。キャシーは WH にいるために激情に抑制が効かず、エドガーの前で嘘と暴力という二重の過失を犯すが、お互いの愛情にもまた抑制が効かず、“outworks of youthful timidity” (57)と“the disguise of friendship” (57)が取り払われる。TG からの教化を受けて、「子供部屋」の「天国」のような深いコミュニケーションが取れなくなったキャシーは、ここでエドガーと「炉辺の楽園」を作り上げるかに見える。しかし、それを脅かすヒンドリの存在によって、結局彼らはもう一つの「天国」である TG に逃れることになるのだ。

キャシーはエドガーからの結婚の申し込みを承諾し、TG の物質的な「天

国」へと移ることになる。このときの彼女が求めているものは、ネリーとの会話によく表れている。

[You] love Mr Edgar, because he is handsome, and young, and cheerful, and rich, and loves you. (61)

I have only to do with the present — I wish you would speak rationally. (emphasis added, 62)

TG との交流によって合理的になった彼女がエドガーに求めているのは、表面的なもの、物質的なもの、わかりやすいものである。そして、それを得ることができるのが TG の「天国」なのだ。しかし、そのようなキャシーに彼女の魂が反発する。

“Here and Here!” [sic.] replied Catherine, striking one hand on her forehead, and the other on her breast. “In whichever place the soul lives — in my soul, and in my heart, I’m convinced I’m wrong!” (62)

彼女を TG へと向かわせる合理性は「額」に、それを引きとめようとする魂は「胸」にそれぞれ存在していると思われる。彼女の魂は、夢で見たようにキリスト教の天国ではなく WH を天国として求め、同じように現世でも、エドガーとの TG での「天国」ではなく、ヒースクリフとの WH での「天国」を求めている。しかし、合理性はヒースクリフとの低い位置での「同一性」を拒み、エドガーとの高い位置での「同一性」を求めている。それらは究極的には正反対の「天国」を求めているのだが、キャシーはその両方を得ようとして（それと同時にヒースクリフとエドガーの両方から得ようとして）ゆくゆくは自分自身を引き裂くことになるのだ。ヒースクリフが行方をくらました後、キャシーは“delirium” (69)に陥るが、これは彼女の魂と合理性が正反対のものを求めつつも、そのときまでうまくバランスが取れていたものが崩れてしまったからであると思われる。

Never a day ut yah're off, but yon cat uh Linton comes sneaking hither; ... It's bonny behaviour, lurking amang t' fields, after twelve ut' night, wi' that fahl, flaysome divil uf a gipsy, Heathcliff! (emphasis added, 66)

ジョウゼフによれば、キャシーは「日中」はエドガーと過ごし、「夜」はヒースクリフと過ごしていた。そしてその状態を保ち続けようとしていた矢先に、魂が求めていたものがいなくなってしまったのだ。

それからまもなく、彼女はエドガーと結婚して TG に移るが、三年ぶりにヒースクリフが戻ってきたことで様子が変わってくる。

[She] sprang forward, took both his hands, and led him to Linton; and then she seized Linton's reluctant fingers and crushed them into his. (75)

キャシーは、自分が媒体となって両者を結び付けようとしている。両方の「天国」を実現するためには、両者が仲良くなってくれるのが一番都合がよいのだが、両者とも上辺の下の相手に対する嫌悪感は明らかである。エドガーは、初めのうちはキャシーが喜ぶ上にヒースクリフが紳士的に振舞うので、彼を締め出すことはできずにいた。しかし、イザベラが思いがけなくもヒースクリフに恋してしまったことから、両者の不和はもはや取り繕うことができなくなる。

キャシーがイザベラを思いとどまらせようとしたのは、もちろんエドガーや彼女のためでもあるのだろうが、どちらかと言うと自分のため、つまり自分のヒースクリフとイザベラがくっつけば彼との「天国」に支障が生じ、さらにはエドガーとの「天国」も掻き回されるからであろう。彼女としては、気持ちは彼とつながっているつもりなのだから、必要以上に干渉してほしくないのだ。一方のヒースクリフとしては、彼女が自分を捨てる原因を作ったエドガーを許せるわけがなく、イザベラとの結婚は彼に復讐するための絶好

の機会となる。エドガーの立場からすれば、ヒースクリフは依然として「地獄のような家」となった WH から来た、TG の「天国」を脅かす侵入者であることに変わりはなく、イザベラを狙っていることがわかった以上、彼を締め出すことを躊躇する理由はない。

キャシーを支えていたのはヒースクリフとエドガーの両方であり、相反するものとはいえ両者を何とかまとめたかったのだが、やはり不和は収まらず、彼女自身がそれを背負うことになる。

It is impossible for you to be *my* [sic.] friend and *his* [sic.] at the same time; and I absolutely *require* [sic.] to know which you choose. (93)

You and Edgar have broken my heart, Heathcliff! ... You have killed me — and thriven on it, I think. (124)

この後彼女は、ヒースクリフが失踪したときのように、再び「精神錯乱」に陥る。順調に見えた TG の「天国」も、結局ヒースクリフという脅威によって崩壊させられることになるのだ。このときの彼女を作り上げている要素である WH と TG を代表するヒースクリフとエドガーが、自分を支えてくれるのではなく自分を中心に反発し合うので、彼女の中でもこの二つの要素、内面（特に魂）と外面（特に肉体）との不調和が進んだことが原因であろう。エドガーの気を引こうと断食を続けるうちに、彼女の内面と外面は分離してしまう。

“Don’t *you* [sic.] see that face?” she enquired, gazing earnestly at the mirror.

And say what I could, I was incapable of making her comprehend it to be her own; (96)

枕を噛み破る前はわかっていた鏡に映る自分の姿が、キャシーにはもはやわからなくなっている。そして、彼女が夢うつつの状態で願っていることは、

WH の自分の部屋にすることである。

I thought I was lying in my chamber at Wuthering Heights.
(97)

I thought ... that I was enclosed in the oak-panelled bed at home; (98)

[That] wind sounding in the firs by the lattice. Do let me feel it — it comes straight down the moor — do let me have one breath! (97)

このときのキャシーは、内面と外面とが分離しているせいで抑制が弱くなり、本当の彼女自身が WH を求めているのである。そして、2 章で見たように「北風」は彼女を表面的なものから解放するものであり、彼女が TG から逃れてたどり着きたいと思っているのが、ヒースクリフとの「子供部屋」の「天国」であるのだ。

その後、キャシーはこの「精神錯乱」が原因であると思われるが、脳炎にかかり、エドガーの献身的な看病もあってそれを克服する。しかし、持ち直したとはいっても内面と外面の分離は治らず、彼女の肉体的な感覚は衰え、逆に精神的な感覚が鋭くなっているようだ。

[They] no longer gave the impression of looking at the objects around her; they appeared always to gaze beyond, and far beyond — you would have said out of this world. (122)

[She] had vague, distant look mentioned before, which expressed no recognition of material things either by ear or eye. (122)

彼女は、もはやヒースクリフからの手紙の文字さえ読めないほど肉体が衰えている。ネリーの言う通り、“Another encounter between you [Heathcliff] and the master [Edger] would kill her altogether!” (116) というような状

況なのだ。

しかし、先程見たように、内面と外面が分離し、外面が内面のお荷物でしかない状態のキャシーにとって、TG はもはや自分の居場所ではない。今こそキャシーにとってヒースクリフがどこまでも必要なものであり、彼女の魂が TG (2 章で見たように抑制と隔離の場所) という“hell” (120)、“frightful isolation” (120) の中にいることを確信しているヒースクリフは、TG 侵入を決行する。そして、キャシーの死期が近いことを見て取った彼は、自分が何をすればいいのかわからなかったのだろうが、彼女の方は自分がどこに行きたいのかははっきりわかっており、彼に同行するように頼む。

[The] thing that irks me most is this shattered prison, after all. I'm tired, tired of being enclosed here. I'm wearying to escape into that glorious world, and to be always there; not seeing it dimly through tears, and yearning for it through the walls of an aching heart; but really with it, and in it. ... I shall be incomparably beyond and above you all. ... Do come to me, Heathcliff. (125)

何度も見てきたように、彼女は TG や肉体から解放されて「栄光の世界」を求めており、それは二回目の「精神錯乱」後に、物理的なものをあまり認識できなくなった代わりに「この世界の外」を見ていたときの、精神的な世界であろう。そして、彼女はそこにヒースクリフと一緒に行きたがっているのだ。

また、二回目の「精神錯乱」のときに WH の自分の部屋（「子供部屋」）にいたりやまた少女に戻ることを望んでいた彼女が、今回はそれらではなく PC や死を望んでいる点も注目すべきところであろう。今回の「精神錯乱」では内面と外面の分離がさらに進み、自分の体のことを「牢獄」とまで言っている。彼女の魂が求めるものも、今回はさらに明確になっているはずだ。2 章で見たように、PC は精神的な領域を象徴している場所である。WH の「子供部屋」が擬似精神的天国であった以上、キャシーが本当に魂の底から求め

る世界は、WH（教化される前の子供時代）ではなく¹⁴ PC（生前や死後の、魂が完全に自由な状態）であり、後ほど見ていくように、WHはPCへの通過点ではないかと考えられる。

キャシーはヒースクリフと抱き合ったまま気を失い、戻ってきたエドガーの介抱を受けて意識を取り戻すも、もはや誰のことも認識できないままキャサリンを産んで死ぬ、つまり教化を受けた肉体と魂が完全に分離するのである。キャシーの中では最後までWHとTGは結びつかなかったが、ネリーによって、彼女の首にかかっていたロケットの中で、エドガーの“light hair” (131)とヒースクリフの“black lock” (131)が結び付けられる。これは、キャシーがWHとTGに引き裂かれて死んだときに生まれた、同じ名前の娘キャサリンの中で、WHとTGが結びつくこと意味しているのであろう。

[With] the Earnshaws' handsome dark eyes, but the Lintons' fair skin, and small features, and yellow curling hair. Her spirit was high, though not rough, and qualified by heart, sensitive and lively to excess in its affections. That capacity for intense attachments reminded me of her mother; still she did not resemble her, for she could be soft and mild as a dove, and she had a gentle voice, and pensive expression: her anger was never furious; her love never fierce; it was deep and tender. (146)

キャサリンは、アンショ一家の黒目とリントン家の白い肌と小さな顔立ち、黄色の巻き髪を受け継いでおり、気質も両方に属するものをバランスよく受け継いでいる。そしてその結果、彼女は調和に向かう流れの中でのキーパーソンになると思われる。次章では、第二世代を中心に、引き続き不調和から調和への流れを見てみよう。

V

WH と TG との不和は、キャシーを通して激しくなり、彼女の死を通して一段落することになる。時を同じくしてイザベラも WH を抜け出し、WH と TG をつなぐものが何もなくなったエドガーは、教会に出席するのさえやめてしまい、活動範囲をほとんど TG に限って、“a complete hermit” (142) のような生活をするようになった。そしてその結果、キャサリンの活動範囲も TG に限られ、外の世界からは隔離された生活をするようになる。

Till she reached the age of thirteen, she had not once been beyond the range of the park by herself. ... Gimmerton was an unsubstantial name in her ears; the chapel, the only building she had approached or entered, except for her own home. Wuthering Heights and Mr. Heathcliff did not exist for her; she was a perfect recluse, (emphasis added, 146-47)

Miss Cathy, conversant with no bad deeds except her own slight acts of disobedience, injustice and passion, rising from hot temper and thoughtlessness, and repented of on the day they were committed, was amazed at the blackness of spirit that could brood on and cover revenge for years, ... She appeared so deeply impressed and shocked at this new view of human nature — excluded from all her studies and all her ideas till now.... (emphasis added, 172)

キャサリンは、地理的にだけではなく、思想的にも外の世界から隔離されて育ってきた。特に思想面の隔離においては、2 章で見たように、TG による人間性の部分的な「排除」が大きな原因になっていると思われる。TG にとっては、WH は「排除」すべきものの象徴、排除すべきものが集約されているところであり、ヒースクリフも含めて存在してはならないのである。しかし、

TGの主であるエドガーが GK に足を運ばなくなったことで、今後キリスト教の影響は弱くなっていくことが予想される。

TG では、エドガーとキャシーによる「天国」は一旦崩壊したものの、新たにエドガーとキャサリンによる「天国」が形成されたと考えられる。しかし、籠の中の鳥として育ってきたキャサリンは、2 章で見たように PC に対して非常に強い興味を持っている。彼女は、エドガーがイザベラのところに行っている間に（隔離作用が弱まっている間に）、PC に引かれて TG と外の世界を区切る“fence, hedge” (149)を越えて行く。彼女が PC に何を求めたのかは定かではないが、やはり PC の持つ強い精神性と関連があるのではないかと思われる。いずれにしても、外の世界に出ることで彼女は WH の存在を知り、それと接触するのである。

WH では、キャシーの死後まもなくヒンドリが死に、正確にはアンショ一家の人間ではないのだが、ヒースクリフが正式に主となった。「子供部屋」の「天国」も「うち」の「炉辺の楽園」も崩壊したままだが、WH は以前のような「地獄のような家」ではなくなり、ある程度落ち着いた場所になっている。初めて WH に接したキャサリンは、いわゆるカルチャー・ショックを受ける。ネリーの言うように、今までお姫様扱いされてきた自分が初対面の相手からひどい悪態をつかれ、さらにその小汚い相手が自分のいとこだと言われたのだから、無理もないだろう。一方のヘアトンも、彼女が何を言っているのかよくわからないようで、かなりの好奇心と驚きをもって見つめていることから、TG に属するものに接したのは今回が初めてであろうと思われる。この時点での WH と TG との接触は一時的なものだったが、イザベラの息子リントンがヒースクリフに引き取られたことで、三年後 WH と TG が再び確執をともなって接触するようになる。

まずは、リントンについて簡単に見てみよう。

A pale, delicate, effeminate boy, who might have been taken for my master's younger brother, so strong was resemblance; but there was a sickly peevishness in his aspect that Edgar Linton never had. (155)

リントンは、「青目 (blue eyes, 160)」と「亜麻色の (flaxen, 160)」髪をもち、非常に病弱で、見た目はエドガーにそっくりである。彼は、ヒースクリフからも“distorted nature” (195)を受け継いでいると思われるが、TG の割合が大分多いと言えるだろう。そして、そのような彼が来たことで WH に変化が生じる。イザベラが来たところには「うち」しかなかった WH に、リントンの部屋として「居間 (parlour, 163)」ができるのである。今まで見てきたように、「居間」は WH の「うち」と対比されるように TG に属するものであり、イザベラが“Have you no place you call a parlour?” (111)と尋ねたとき、ジョウゼフは「あざけるように (sneeringly, 111)」“*parlour! Nay, we’ve no parlours.*” (111)と答えるのである。リントンが大嫌いなヒースクリフは、WH の中で彼を「居間」に隔離しているのだ。

キャサリンの誕生日はキャシーの命日でもあり、エドガーはその日は決まって一人で過ごしていた。そして相手にされないキャサリンは、自分で何か気晴らしを見つけなければならなくなる。この日に限っては、エドガーとキャサリンの「天国」は影が薄くなりがちであったようだ。彼女の十六歳の誕生日、エドガーは例年通り一人で過ごすので、彼女はネリーと荒野へ散歩に出かける。そして、そこで再び WH と接触することになる。

ヒースクリフはエドガーが死ぬまで待っているつもりだったのだろうが、都合よくキャサリンを捕まえたので、リントンの健康状態のこともあり、二人を結婚させてより確実に TG を手に入れる手段をとったのだと思われる。つまらないヘアトンや本当は悪人であるとわかったヒースクリフがいても、TG の要素が多いリントンがいたので、キャサリンは WH と（正確には WH の中の TG と）手紙での交流を続けていた。しかし、ネリーに見つかったことでそれも終わり、彼女はまた TG に隔離される。キャサリンとリントンとの手紙のやり取りは、ネリーによって“romance” (176)と表現されている。

「ロマンス」あるいはロマンティックという言葉は作品中で三回使われており、残りの二つはイザベラのヒースクリフに対する「ロマンス」(118)、ロックウッドのキャサリンに対する“romantic” (232)であるが、いずれも TG に属する、あるいは近い人物たちが持っている感覚であることがわかる。キャサリンは、リントンとの関係によって、間に荒野をはさみつつも、隔離を破

って TG「天国」を補おうとしていたのではないだろうか。ネリーは、キャサリンは隠遁生活に完全に満足している「ように見えた (apparently, 147)」と言っているが、彼女が“The Grange is not a prison, Ellen” (186)と言っていることから、実際は TG「天国」に何かが欠けていると感じていたに違いない。PC に強い興味をもったのもそのせいであると思われる。

一旦は途切れた二人の交流も、ヒースクリフの策略によってキャサリンが TG から誘い出されたことで再び始まる。キャサリンとネリーが WH に来たとき、ヒースクリフは外出しているようで、「うち」にはリントンだけがいた。二人はけんかもしつつ、仲直りもしつつ、そこで「炉辺の楽園」を形成する可能性が感じられる。しかし、WH 通いの後半の日々、キャサリンは「居間」でリントンと過ごしている。彼らが「居間」で会うようになったのは、「うち」での「炉辺の楽園」がまだ形成途中であるにもかかわらず、それがヘアトンによって崩されたからである。この際のジョウゼフの台詞は非常に興味深いものである。

Aw wer sure he'd sarve ye eht! He's a grand lad! He's
getten t' raight sperrit in him! He (sic.) knaws — Aye, he
knaws, as weel as Aw do, who sud be t' maister yonder. Ech,
ech, ech! He mad ye skift properly! (emphasis added, 192)

彼は、誰があの部屋の主であるべきかという言い方をしている。エドガーとキャシーが「うち」で「炉辺の楽園」を形成できなかったのも、そのときの「うち」の主がヒンドリだったからだ。そして、物語の最後では、ヘアトンとキャサリンが「炉辺の天国」を形成しているようである。つまり、場所の性質と人物の性質との関係によって、それぞれの場所で「天国」を形成できる人物が決まっていると言えるのである。このことは、ロックウッドの“my home is not here. I'm of the busy world, and to its arms I must return.” (196)という台詞にも表れているだろう。彼は TG に近い人物であるが、正確には TG の持つ薄っぺらさがさらに強いと思われるロンドンの人物である。彼は、ここでは「天国」を形成することができないのだ。

しかし、引き続き二人が TG に属する「居間」で会っていたときも、「天国」を形成していると言うには心もとなさすぎる。そもそもリントンの後ろには常にヒースクリフが存在しており、キャサリンとリントンとの関係は偽りの「天国」と呼ぶべきものだろう。

結局キャサリンの WH 通いは、ネリーに見つかったことで終わり、彼女は再び TG に隔離される。その後、二人の強い希望もあって、エドガーの健康上の理由や両家の間の反発から、“moor” (198)に限ってではあるが、彼らは会うことを許される。「荒野」は、特定の属性をもたない中立地帯であると言えるだろう。しかし、ヒースクリフとキャシーがそうであったように、「荒野」も聖域とはなりえない。キャサリンは、ヒースクリフの策略によって WH に監禁され、リントンと一緒に「居間」で過ごすことになる。TG の要素が多いリントンと一緒にいても、そこは偽りの TG「天国」どころか、もはやエドガーとの本当の TG「天国」から引き離された監獄である。「居間」と言っても、所詮は WH 中の「居間」に過ぎないのだ。彼女は、そのような場所から「子供部屋」の窓を通して抜け出し、本当に自分がいるべき TG「天国」へと戻って行く。

エドガーの死に目には会えたものの、彼の死で TG「天国」は終わりを告げる。TG の主となったヒースクリフは、18 年前に来客として通された部屋に、今度は主として入ってくる。¹⁵ 先程述べたように、彼は形式的には TG の主だが、TG の人間ではないので、そこでは「天国」を形成することはできない。彼自身が“*she [Cathy] must be somewhere at the Heights, I was certain!*” (221)と言っているように、彼が「天国」を形成できるのは WH だけなのである。

ヒースクリフは、憎むべき仇どもの血を引くヘアトン、キャサリン、リントンをあえて WH に置くこと、つまり自分の支配下、管理下に置くことで、彼らに対する“triumph” (161)を味わおうとしているのだと思われる。ヒースクリフは用がなくなったリントンへの圧力を無くし、キャサリンは彼と「居間」で二人だけの時間を過ごせるようになるのだが、ひたすら彼の看護に追われ、まもなく死を見取ることになる。

リントンの死後、キャサリンは「うち」で過ごすことが増えるが、彼女に

興味を持っているヘアトンには反発を示していた。それから間もなく、WHにネリーが呼ばれた。彼女は、“My first interview with her grieved and shocked me! she had altered so much since our separation.” (236)と言っていることから、キャサリンは、イザベラがそうであったように、WH化されてしまったのだと思われる。しかし、ネリーがTGの品々をこっそり持ってきたことで、「居間」はTGの要素が多くなり、ネリーと「居間」で過ごすことでキャサリンもWH化が緩む。つまり、WHとTGとの間にバランスが取れつつあるのだ。本来ならヒースクリフが黙ってはいないはずだが、“It will be odd, if I thwart myself” (231)と言っているように、ネリーが来る前に彼には変化が起り始めている。それは、今まで対立してきたWHとTGの主がいなくなったことと関係があるだろう。両者の反発が弱まり、ヘアトンとキャサリンが同じ家の中にいることが、彼に人の調和の兆しを感じさせているのではないだろうか。

このころからキャサリンに変化が見られ始める。今まで見てきたように、登場人物のほとんどは、彼ら自身の「天国」を求めて生きている。そしてそれは男女が一組で「同一性」を持ち、圧力のない自由な状態で、彼らが居るべきところにいるときに形成されるようである。ネリーの説明によれば、彼女が落ち着かなくなってきたのは、一つは彼女が“confined to its narrow bounds” (237)という状態にあったこと、もう一つは“loneliness” (237)であったことである。彼女がヘアトンに関心を示しだしたのも、「天国」を求めようとしているからではないだろうか。彼女がWHとTGの要素をバランスよく受け継いでいることはすでに見たとおりだが、それは彼女が「居間」でも「うち」でも、TGに属する相手でもWHに属する相手でも「天国」が形成可能であることを意味している。台所で両者が好きな“book” (240)という媒体を通して和解した後、二人はヒースクリフがいない間は「うち」で「炉辺の楽園」を形成し、ヒースクリフとキャシーが失ってしまった「同一性」を、「本」を通して目指して行く。

ヘアトンが教化されていく途中、今度はジョウゼフの「黒スグリの木」が“plants from the Grange” (242)に植え替えられようとする。彼の苦情で植える位置は変わったものの、さらにWHにTGが入ってくることになる。以

前触れたように、WH は確実に変化しているのだ。ヘアトンとキャサリンの仲が進んだことは、ヒースクリフ自身が“I think he’s safe from *her* love” (167-168) と言っているように、彼にとっては予想外のことであったと思われる。しかし、そんなことには気を遣ってられないほど、彼は他の事に捕われている。

ヒースクリフの言う“a strange change” (247)の原因は、本人も認めるようにヘアトンとキャサリンにある。

I take so little interest in my daily life, that I hardly remember to eat, and drink. Those two, who have left the room, are the only objects which retain a distinct material appearance to me; and that appearance causes me pain, amounting to agony. (emphasis added, 247)

彼は、「あの二人だけが、俺にとって（一つの）はっきりとした、実体のある姿を保っている」と言っている。ヘアトンとキャサリンが結びつくことで、彼らはヒースクリフにキャシーを見せているのではないだろうか。18年間見えそうで見えなかったキャシーの霊が、このことをきっかけにして見え始めるのである。そして、彼の魂はすさまじい力でキャシーの霊に引き付けられる。このときの彼の様子は、死ぬ前のキャシーの様子とよく似ている。

Don’t, for God’s sake, stare as if you saw an unearthly vision. (emphasis added, 253)

He roamed to and fro, meantime, in a state approaching distraction; (emphasis added, 254)

彼の肉体と魂は分離し始めたに違いない。仇の血を引く者たちに復讐する意志が消えたのも、その他あらゆる肉体活動が低下しているのも、それが原因であろう。そして、ヒースクリフは「子供部屋」で息絶え、つい“*my* heaven” (255)と呼ぶべきところに行き着く。ここでは、WH が建つ以前の、PC と同

じような精神的な領域であった<丘>の「天国」が再形成されたと考えられる。不調和を背負って死んだキャシーも、これによって救われるのである。その後、二人は開け放たれた窓から外に出て、もっとも神聖な精神的領域である PC に向かい、そこで式を挙げたのではないだろうか。PC には「妖精の洞窟」があると言われているが、ネリーが“Fairy Annie's Wedding” (235) を歌っている場面は印象的である。

ヒースクリフが<丘>の完全な精神的天国の主となったことで、その上に乗っているだけに過ぎない WH はさらに変化が進む。ネリーが、“I don't like being left by myself in this grim house — I cannot help it,” (257) と言っているように、<丘>の領域から肉体を持つものは追い払われるのである。「子供部屋」が無人の WH の「天国」であることと対照的に、「炉辺の楽園」は有人の WH の「天国」であったと思われる。ヘアトンとキャサリンは、秋の嵐によって GK が崩壊し、冬にキリスト教の影響が亡くなってから TG に住む予定になっている。WH が排除されない新しい TG で、WH の「炉辺の楽園」は TG の物質的な「天国」と融合し、1500 年以前、不調和が始まる前の人間の調和が取り戻されることになることが予想される。¹⁶

その昔、人は自然の一部であったのだと思われる。そして彼らは自然と共に「天国」を形成していた。しかし、彼らは人間を目指して教化を受けたことで、自然の一部の人として持つべき部分 (WH) を切り離してしまい、人々の間に大きな不調和が生まれることになった。その結果、人と自然との「天国」は崩壊、二種に分かれた人々はそれぞれの領域で自分たちの「天国」を求めるが、もはや不完全な「天国」しか形成することができない。なぜなら、彼ら自身が不完全だからである。

そのようなとき、この世界にそのどちらにも属さないヒースクリフがやって来た。正確には彼は WH が建っている<丘>に属していると思われる。彼がもっとも WH らしいというのは、2 章で建物の様子が立地条件に影響されることを見たように、彼が WH の土台となっている<丘>に属していたからである。ヒースクリフがキャシーを失ったと感じたときに一次的な大嵐が起こったように、彼の感情は強く自然と共鳴している部分がある。幼くして死んだヒースクリフの霊が一度<丘>に属し、つまり自然に返り、再び肉体を

ともなって WH に戻ってきたためであろう。

彼は<丘>では自然との天国を形成することができなかった。それにはキャシーが必要だったからである。彼はこの世界に戻ってきて、再びキャシーと一緒に自然と人との「天国」を形成しようとするのだが、人の不調和のためにそれを阻まれてしまう。不調和をもっとも背負ったキャシーの死と引き換えに、反発する二つの要素が結び付けられたが、悲しみにくれたヒースクリフは、それぞれの要素を統べる者にその報復を与えた。ヒンドリとエドガーがいなくなったことで不調和は緩み、キャシーが命と引き換えに残した結びつき、キャサリンが人の調和を取り戻そうとするとき、ヒースクリフは自然と人との「天国」の再形成へ向けて、犠牲になったキャシーのもとへと戻って行く。そして今度こそ、現世（物質的なレベル）と来世（精神的なレベル）の両領域において、人と自然は「天国」を形成することができるのだと思われる。¹⁷

結

ブロンテが求めていたのは、自然と人間との強いつながりである。¹⁸そして『嵐が丘』の中で彼女が求めていたものもまた、自然と人間とのつながりなのである。『嵐が丘』には、人のあるべき姿、人と自然が共にある理想の「天国」の崩壊と再形成が重要なテーマとして取り上げられている。そして本論で見てきたように、第一世代では人の不調和、第二世代では調和への流れが描かれており、第一世代だけを描いたのでは調和が取り戻されないまま物語が終わってしまう。ヒースクリフがキャシーの後を追ってすぐに死んだとしても、自然と人との「天国」は取り戻されず、二人の「天国」も不完全なものになってしまうのだ。二人の精神的なレベルでの交わりにもっとも重点がおかれているには違いないのだが、それが完全なものであるためには、来世と現世の両方においてその土台ができること、つまり WH と TG の融合が必要になってくる。二人の「天国」は決して孤高なものではなく、あらゆる他のものとのつながりの上に成り立っているものであり、¹⁹ヘアトンとキャサリンの「天国」のためにも、ヒースクリフとキャシーの「天国」が必要になっ

てくるのだ。

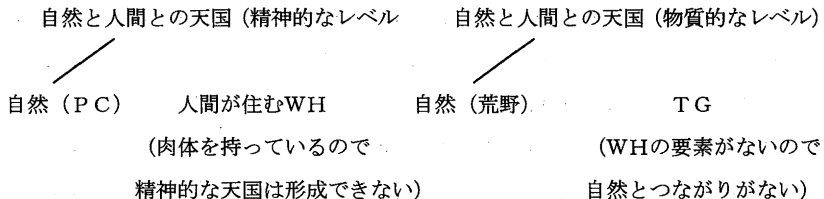
人の調和こそが WH と TG の分離によって失われたものであり、その回復の過程が描かれている第二世代は、やはり『嵐が丘』において必要不可欠な要素であると言えるのである。

註

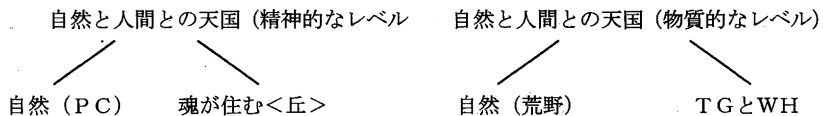
1. Thomas Moser, "What Is the Matter with Emily Jane?: Conflicting Impulses in *Wuthering Heights*", *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 17 (1962) 1-19. など。
2. 廣野由美子、『『嵐が丘』の謎を解く』（大阪：創元社、2001）191-192。
3. キャシーの目は黒に違いないとは思うのだが、断定を避けたのは、ヘアトンの目が "brown [-eyed]" (85) とされているからである。ヒンドリの目について断定を避けたのも同じ理由から。
4. 他に、エドガーの死後 WH に移ったキャサリンが、本棚から "Black Art" (12) の "dark book" (12) を取り出す場面。また、"a black frost" (7) で地面が硬くなった冬場の丘の頂上 (WH が建っているところ)。WH は "the building old and dark" (159) など。
5. Emily Brontë, *Wuthering Heights*, ed. Richard J. Dunn, (New York: W · W · Norton & Company, 2003) 4. 以後、本書からの引用は、本文中の括弧内にページ数のみを記す。
6. Mark Schorer, "The Metaphers in *Wuthering Heights*", in *CRITICS ON CHARLOTTE AND EMILY BRONTË*, ed. Judith O'neil (London: George Allen and Unwin Ltd. 1968) 61. ショーラーは、この論の中で、作品中の人間を動物や植物を使って比喻した例を多数挙げている。
7. 85 ページの記述から、TG の北東にあるのは WH と PC である。
8. 63 ページのキャシーが見た夢を参照。周知のように、ブロンテはキリスト教に否定的であったとする立場が一般的である。Stevie Davies, *Emily Brontë: Heretic* (London: Women's Press, 1994) 19. など。

9. エミリ・ブロンテ、「蝶」『ブロンテ姉妹の留学時代』中岡洋編著訳（東京：開文社出版，1990）132-135。
10. Eric Solomon, "The Incest Theme in *Wuthering Heights*", *Nineteenth-Century Fiction*, Vol. 14.1 (1959) 80-83. ソロモンの言うようにヒースクリフがアンショー氏の隠し子であったどうかは定かではないが、二人の間に家族と呼べるような特別なつながりがあったことは否定できないだろう。
11. ここではむしろ黒いもの全般を指すと思われる。イザベラの死を知らせる手紙に黒い縁取りがついていることから、喪服だけに限らず、＜黒＞と＜死＞は強く結びついている。
12. ここでは"drawing-room" (38)の様子が「天国」と言われているが、これから見ていくように、TG でもっとも重要な場所はリントン一家が集まる「居間 (parlour, 75)」である。以後、TG の「天国」という場合は「居間」を指す。
13. フランシスがどのような人物であったのかはよくわからないが、ヒースクリフを嫌っていたこととヒンドリの激しい気質が彼女に共鳴していたことから、結果的に彼女は WH 的なものを抑えていたのではないと思われる。また、黒髪とおそらく黒目を持っているヒンドリの子ヘアトンが、"brown curls"(9)と「茶色の目」をしていることから、彼女によって WH の性質は弱められたことがわかる。
14. WH を求めている二回目の「精神錯乱」のときは、キャシーに対する"childish" (95)、"baby(-work)" (96)、"child" (97)などの表現が見られる。
15. 75 ページの記述では、18 年前にヒースクリフが来客として通された部屋は二階の「居間」となっているが、218 ページの記述では、彼が主人として入ってきた部屋は「書斎 (library, 218)」となっている。ネリーが三年ぶりに彼を見た場所を間違えるとは考えにくく、作者の間違いだと思われるが、「居間」か「書斎」かで重要度が変わってくるので、ここでは断定は避けておく。
16. Virginia Woolf, "*Jane Eyre and Wuthering Heights*", ed. Miriam Allott, *Emily Brontë Wuthering Heights* (London: Macmillan, 1970) 122. ウルフは、「エミリは世界の裂け目から巨大な無秩序状態を垣間見、彼女自身の中に本を通してそれを結びつける力を感じた」と述べている。

17. <不調和>



<調和>



18. Elizabeth Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, ed. Elisabeth Jay (London:

Penguin, 1997) 104. シャーロットによれば、ハワースを離れてホームシックになったエミリは、このままでは死んでしまうかと思われるほど衰弱してしまった。

19. フィリス・ベントレー、『ブロンテ姉妹とその世界』、木内信敬訳 (東京: 新潮社、1996) 171-172.、David Cecil, "Emily Brontë and *Wuthering Heights*", *Critical Essays on EMILY BRONTË* (New York: G. K. Hall & Co, 1997) 144-150. ベントレーとセシルも、ブロンテがあらゆる物が合わさって一つの大きな体系を形成しているという思想をもっていたことを指摘している。